

関係各位

大阪府環境農林水産部農政室長

病害虫発生予察情報について

標記について下記のとおり発表したので送付します。

病害虫発生予察 特殊報 令和5年度 第2号

病害虫名 : **ピーマン炭疽病** (*Colletotrichum scovillei* Damm, P.F. Cannon & Crous)

1 発生作物 : ピーマン

2 発生地域 : 泉州地域

3 発見の経緯

- (1) 令和5年9月下旬、泉州地域の露地ピーマン栽培ほ場において、果実と茎に炭疽病とみられる症状が発生した(図1、2)。発病株では、これまで府内で発生していた本病による被害に比べ激しい症状を示していた。



図1 果実の被害



図2 ほ場での発生の様子

- (2) 農林水産省神戸植物防疫所に罹病株を持ち込み、菌種同定を依頼したところ、令和6年3月12日に *Colletotrichum scovillei* による炭疽病と診断された。府内では本病原菌によるピーマン炭疽病の発生は初確認である。

4 国内の発生状況

本病原菌は平成17年に島根県で初確認され、その後、兵庫県、福島県、千葉県、山口県、熊本県、岡山県、愛媛県等で発生が確認されている。

5 本病の特徴

- (1) 果実では、はじめ水浸状のややくぼんだ小斑点を生じ、その後、斑点が拡大し同心円状の輪紋となり、表面に鮭肉色の分子子塊が形成される。  
(2) 葉及び果梗には、斑点病に類似する病斑を生じることがある。  
(3) 降雨等とともに急激に発生が拡大し、著しく減収する恐れがある。

## 6 発生生態

- (1) 本病原菌は、罹病株残渣とともに土壤中越冬し、翌年の伝染源となる。また炭疽病は一般的に種子伝染するとされている。
- (2) 降雨やかん水時の土壌の跳ね返りにより分生子が飛散し感染する。また傷口から感染しやすい。
- (3) 本病原菌の最適生育適温は25～28℃付近であり、梅雨時期から発生が始まり、盛夏期以降から徐々に発病が増加し、秋雨の時期にまん延する。
- (4) 本病原菌は、ピーマン、とうがらし類をはじめ、複数の植物に病原性を有し、多犯性の病原菌とされている。

## 7 防除方法

- (1) 発病葉や発病果は発見次第除去し、圃場内や周辺に放置せず伝染源とならないよう適切に処分する。また、落葉もできるだけ処分する。
- (2) 雨よけ栽培やマルチ被覆等により降雨による跳ね上がりを防ぐ。
- (3) 整枝・せん定を行い、果実に傷がつかないように支柱や枝つりなどで固定する。
- (4) 本病が多発すると薬剤散布では十分な防除効果は得られにくいので、降雨の状況に注意を払い、予防散布並びに発生初期からの薬剤防除を実施する。本病に対するおもな登録薬剤は以下のとおり(表)。なお、薬剤防除の際は、耐性菌の出現防止のため、同一系統の農薬の連用を避け、ローテーション散布を実施する。

表:ピーマン炭疽病に登録のあるおもな薬剤一覧

(令和6年3月18日現在)

薬剤名	成分名	系統 (FRAC)	希釈倍数 ・使用量	使用時期 /使用回数	使用 方法	適用作物	
						ピーマン	とうがらし類
ダコニール 1000	TPN	M5	1000 倍 ・100～300L/10a	収穫前日まで /3回以内	散布	○	×
ベジセイバー	ベンゼン系、 TPN	7、 M5	1000 倍 ・100～300L/10a	収穫前日まで /3回以内	散布	○	×
アミスターオブ ティフロアブル	アミスターオブ、 TPN	11、 M5	1000 倍 ・100～400L/10a	収穫前日まで /3回以内	散布	○	×
シグナム WDG	ピラクトロリン、 ホスファイト	11、 7	2000 倍 ・100～300L/10a	収穫前日まで /2回以内	散布	○	○
セイビアーフロ アブル 20	カルジキノール	12	1000 倍 ・100～300L/10a	収穫前日まで /3回以内	散布	○	×
スクレアフロア ブル	マンデスチン	11	2000 倍 ・100～300L/10a	収穫前日まで /3回以内	散布	○	○

※その他、ベンレート水和剤、トップジン M 水和剤もピーマンの炭疽病に登録があるが、本菌種による炭疽病には、これらのベンゾイミダゾール系薬剤の効果が悪るとの報告がある。

※ダコニール 1000、ベジセイバー、アミスターオブティフロアブルに含まれる成分 TPN の総使用回数は3回以内。

◎防除薬剤については、使用前に登録内容を

農林水産省農薬登録情報提供システム (<https://pesticide.maff.go.jp/>) で確認してください。